

特別支援学級と通常学級間の交流及び共同学習のあり方

M16EP009

名取 美優

1.問題と目的

(1)交流及び共同学習について

交流及び共同学習の意義について文部科学省（2009年以前）は以下のように述べている。

「障害のある子どもが地域社会の中で積極的に活動し、その一員として豊かに生きる上で、障害のない子どもとの交流及び共同学習を通して相互理解を図ることが極めて重要です。」また、「社会を構成する様々な人々と共に助け合い支え合って生きていくことを学ぶ機会となり、ひいては共生社会の形成に役立つものと言えます。」

このように交流及び共同学習は、障害の有無にかかわらず、子どもたちが共に生きていくことを学ぶ機会として捉え、行っていく必要があると考えられる。

そして、交流及び共同学習での学びについて高畑（2012）は、「共に活動し、双方向的に交流が実現してこそ、共に響きあい、豊かな人間性をはぐくむことができると言える。また、…中略…共に学び、達成感を得ることができるであろう。」と述べている。このことより、本研究では交流及び共同学習の学びについて「通常学級の児童と特別支援学級の児童が双方向的に交流を行い、その中で共に学ぶこと」と考えた。

(2)交流及び共同学習に対する通常学級担任と特別支援学級担任の現状

遠藤・佐藤（2012）は、ある市の交流及び共同学習を行っている通常学級担任及び特別支援学級担任を対象に調査を行った。その調査項目の1つ「交流における課題は何ですか」に対する回答が以下の図1と図2である。

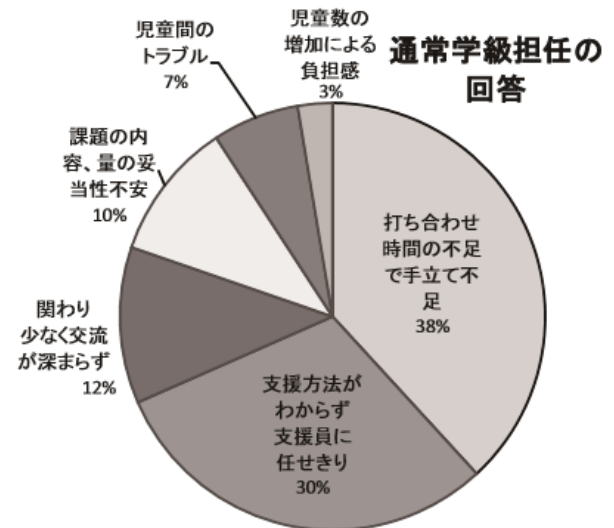


図1. 通常学級担任が考える交流及び共同学習の課題

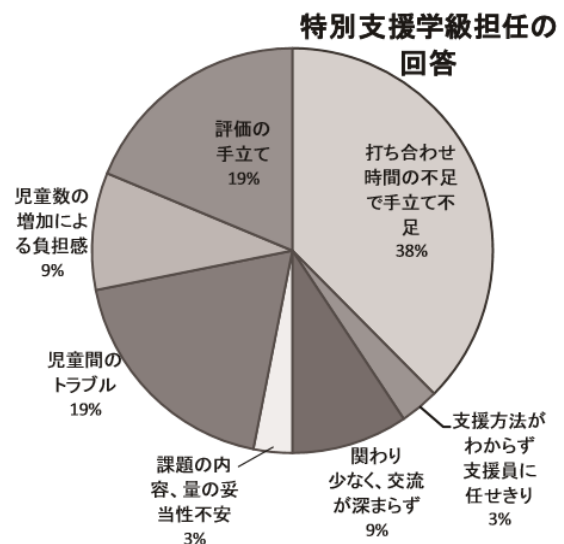


図2. 特別支援学級担任が考える交流及び共同学習の課題

図1, 図2では, 通常学級担任, 特別支援学級担任ともに「打ち合わせ時間の不足で手立て不足」が一番多く, ともに約4割を占めている。

一方, 通常学級担任と特別支援学級担任の間で意識の差が大きく出たのが, 「支援方法がわからず支援員に任せきり」という回答である。これは, 特別支援学級担任の3%に対し通常学級担任は30%である。このことから, 通常学級担任は, 特別支援学級担任との打ち合わせの時間が十分にとれていない中で, 支援方法がわからないまま指導をしなければならない状況であることが見て取れる。そのような状況の中で, 通常学級担任が交流及び共同学習を考えていくための具体的な手立てが必要なのではないかと考えた。

そこで, 本研究では, 文献研究, 参与観察, 授業実践を通して, 通常学級の担任の立場から, 交流及び共同学習のあり方について手立てや支援という視点から考えることを目的とする。

2. 方法

(1)実習について

学校：山梨県内公立小学校

学年：第6学年

期間：2016年5月～11月

(2)研究方法について

①参与観察

対象クラス, 対象学年, 特別支援学級における授業や交流及び共同学習が行われている授業の参与観察を行った。また, 授業時間以外の児童同士のかかわりも観察を行った。

②授業実践

教科：音楽

題材：気持ちを合わせて合奏をしよう
「情熱大陸」(合奏)

授業時間：全7時間

3. 研究内容

(1)交流及び共同学習についての実態

対象学級では音楽, 体育, 図工, 家庭科, 総

合的な学習の時間, 道徳, 特別活動の時間に知的障害特別支援学級の児童(以後A児)が共に学んでいる。これらの時間は, 基本的に特別支援学級の教師または支援員の教師と一緒に入っている。

A児は, 明るい性格であり, 周りの児童や教師に自分から話しかける姿が見られた。また, 周りの児童もA児と積極的にかかわろうとする姿が見られた。

通常学級担任は交流及び共同学習の時間に, 活動の様子を見ながらA児の活動を認め, 褒めるような言葉かけを行ったり, 周りの児童にA児に注目させるような言葉かけを行ったりしていた。

総合的な学習の時間には, グループの中でA児に役割を与えて一緒に活動を行ったり, A児が周りの児童の活動をのぞいたりしていた。また, 給食時には, A児は毎日ストローを配る役割があり, それを行いながらA児からコミュニケーションをとったり, 通常学級の児童からコミュニケーションをとったりする姿が見られた。

(2)授業実践における交流及び共同学習

①対象について

今回の実践は, 第6学年全児童と知的障害の特別支援学級に在籍するA児と一緒に音楽の授業を行った。

②音楽を設定した理由

小学校学習指導要領解説音楽編(文部科学省, 2008)の中に改善の具体的事項として, 「斉唱や簡単な合唱・合奏など全員で一つの音楽をつくっていく体験を通して, 協同する喜びを感じたりする指導を重視する。」と書かれている。また, 第3節第5学年及び第6学年の2内容のA表現の器楽の活動についての指導事項の解説の中に, 「重奏や合奏による器楽の表現の楽しさを味わい, 心を合わせて演奏しようとする意欲を育てることが大切である。」とある。「全員で一つの音楽をつくっていく体験を通して, 協同する喜びを感じたりする」や「合奏による器

楽の表現の楽しさを味わい、心を合わせて演奏しようとする意欲」という点は、交流及び共同学習を行っていく上でのねらいと共通する点なのではないかと考えた。

また、対象学年が第6学年ということで、最高学年として合奏を後輩たちに発表をすることを最終目標に、共に練習をし、達成感を味わう中で、小学校卒業前に改めて仲間意識をもたせたいという考えもあり、音楽を選んだ。

(3)具体的な手立て

文献研究や参与観察、交流及び共同学習についての実態を踏まえたうえで、交流及び共同学習を行っていく上での手立てとして以下の3点を考えた。

①指導案の工夫

指導案の中に、「交流及び共同学習に関する手立て」の欄を設け、活動内容や手立てを指導案上に明記し、通常学級担任と特別支援学級担任同士での共通認識を図ることを意図した(表1)。

表1. 音楽科学習指導案 展開部分

学習活動と内容	予想される児童の反応と教師の働きかけ(○)個別の支援(●)	交流及び共同学習に関する手立て
全体の学習内容	○予想される児童の反応 ○全体に対する教師の動き・働きかけ ●特別支援学級児童への個別の支援	◎交流及び共同学習に関する活動の内容 ◎児童のかかわりについての支援

②場の設定

児童同士が意識しあったり、学びあったりすることをねらいとして、意図的に場の設定を各時間の中で行っていった

ア.グループ活動

児童同士の学び合いの場としてグループ活動を行い、目標を考えさせることで児童同士が意識しながら活動を行うことを意図した。

イ.A児が活躍できる活動

A児を前に出したり、向かい合わせて活動を行ったりすることで、児童同士が意識しながら活動を行うことを意図した。

③個別の対応

A児の活動を充実させたり、児童同士のかかわりをつくりだしたりすることをねらいとして行った。

ア.A児への個別の指導

全体の活動に合わせながらA児へ個別の課題を与えることで、A児の活動を充実させることを意図した。

イ.児童への言葉かけ。

活動の様子を見ながら、A児や周りの児童に言葉かけを行っていくことで、児童同士のかかわりを促すことを意図した。

4. 授業実践

(1)単元計画

表2に示した計画で授業を行った。

表2.単元計画

時	学習内容
第1次 楽曲や楽器について考えてみよう	
1	○楽曲のイメージを持つ。 ○合奏に使う楽器をグループで考える。
第2次 リコーダーで演奏してみよう	
2	○小節ごとに全体でリコーダーの練習をする。 ◇リコーダーもしくはタンバリン、オルガンを使って活動をする。
3	○復習と前回の続きのリコーダー練習をし、聴き合う。 ◇リコーダーもしくはタンバリン、オルガンを使って活動をする。
第3次 それぞれの楽器で練習しよう	
4 5 6	○グループごとに目標を立てて練習をする。 ○今日の成果を発表し合う。
第4次 みんなで合奏を完成させよう	
7	○グループ活動を行い、最後に全員で1曲演奏をする。

なお、○は全体共通の学習内容、◇はA児の学習内容となっている。

(2)授業での交流及び共同学習のねらい

全体のねらいは、「みんなで練習したり、演奏したりする中で、人間性や社会性を形成していくこと。また、そのような活動を通し、みんなでつくりあげる喜びや成功した時の達成感を共に味わうことで、互いの仲間意識を育んでいくこと」とした。また、A児のねらい

は、「まわりの児童とかかわりをもちながら活動を行い、その中で楽器の演奏ができるようになること」とした。

(3)具体的手立てや支援の実際

①指導案の工夫について

表3、表4は、作成した指導案の一部抜粋である。なお、今回の研究での具体的な手立ては、太枠で示してある。

表3. 2時間目 リコーダーで演奏してみよう (指導案展開部一部抜粋)

学習活動と内容	予想される児童の反応と教師の働きかけ (○) 個別の支援 (●)	交流及び共同学習に関する手立て
<ul style="list-style-type: none"> ・リコーダーパートのCDを聴く。 ・小節ごとに練習をする。 1.CDを聴きながら、「タ」で歌う。(全体) 2.音を出さずに指の練習。(全体) 3.音を出して練習。(全体) 4.個人練習(1分) 5.全体でもう1度 以上の過程を繰り返す。	<ul style="list-style-type: none"> ○黒板に階名が書いてある紙を貼る。 ○楽譜を指さしする。 ○リズム打ちをする。 ●最初の部分のリコーダーの指使いのプリントを配っておき、T.Tの先生と練習をしてもらう。 ○個人練習前と後に必ず、わからないところがあるかと聞く。 ○楽譜を指さしながらリズム打ちをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎A児が練習していることに周りの児童が気づき、注目できるようにする。 ◎同じリコーダーを使った活動をさせる。 全体⇒情熱大陸を小節ごと練習。 A児⇒指定した1音を練習。 ◎A児にオルガンでリズムをとる役割をさせる。 「Aくん、先生と一緒にリズムをとっていただけますか。」

表4. 5時間目 それぞれの楽器で練習しよう (指導案展開部一部抜粋)

学習活動と内容	予想される児童の反応と教師の働きかけ (○) 個別の支援 (●)	交流及び共同学習に関する手立て
<ul style="list-style-type: none"> ・移動をして、グループごとに練習をする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> リコーダー (6-1) ピアノ (6-2) 打楽器・木琴・鉄琴 ピアノ・バス (音楽室) </div>	<ul style="list-style-type: none"> ○移動の前に時間を見て何分まで練習を行うかを決め、時間になったら音楽室に戻ってくるよう伝える。 ○移動場所を伝え、リコーダーは人数が多いので練習する時は、机に楽譜を置き、立って練習するよう伝える。 ●T.Tは、A児のグループ(音楽室)に入り、様子を見ながらA児に指導を行ったり、他の子に指導を行ったりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎A児がグループで活動を行えるように、状況を見ながら、活動場所の指示を行う。 ◎周りの児童がA児を誘ったり、一緒に活動をしたりできるように様子を見ながら、言葉かけを行う。 周りの児童に対し、 「A君どこに行ったかな。」 A児に対し、 「みんな向こうにいるよ。」

「交流及び共同学習に関する手立て」の欄を入れることで、指導案の学習活動と内容の流れに合わせながら交流及び共同学習として、何を子どもたちにさせたいかということを考えやすくなった。

一方、この指導案を見ただけでは、それぞれの教師がこの授業の中でどのように動いているかが分からず、うまく連携をとることができなかった。指導案を見ただけで、どのような活動であるか、どのように動いたらいいのかが分かるような形にしていく必要があると考えられる。

②グループ活動について（場の設定）

グループ活動を行う中で、児童同士がかかわりを持ち、意識し合いながら活動を行っていきようにするために目標設定を行わせた。目標の項目としては、以下の2つの項目についてグループで考えさせた。

- ・技術的な目標
- ・技術的目標を達成するためにどのようにしたらよいか

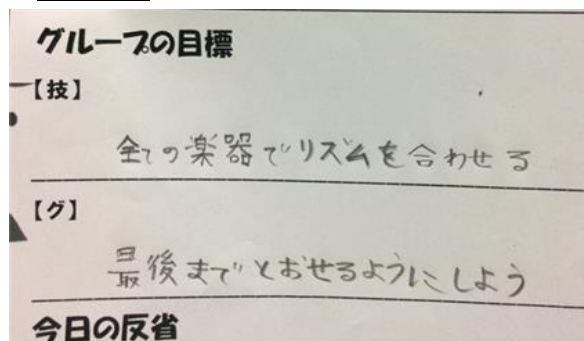


図3.児童のワークシート

図3は、A児がいる打楽器グループが設定した目標である。技術的な目標を「全ての楽器でリズムを合わせる」とし、そのためにグループでどのようにしたらよいかという目標を「最後まで通せるようにしよう」と設定している。目標設定を行う際、「グループみんなが上達できるような目標を立てられるといいね。」と言葉かけを行い、お互いに意識しながら活動をしていけるような目標設定を意図して行った。具体

的には、「得意な人が苦手な人に教える。」などといった目標設定を考えていたが、「どのようにしたらいいか」といった指示が抽象的で分かりにくく、意図したような目標設定ができなかった。

③場の設定と個別の対応について

手立てとして考えた場の設定と個別の対応の具体的な実践を授業の様子を踏まえたうえで説明する。

ア. 第2次 リコーダーを演奏してみよう (全体の第2時間目)

「情熱大陸」を小節ごとにリコーダーの練習を行った。全体で確認をしてから個人で練習するという流れで行っていった。

個別の対応として、他の児童と同じ場で、同じような活動の中でA児ができそうなことを課題として与えるようにした。具体的には、リコーダーを吹くことが難しいA児に対し、指定した1音だけを練習するように課題を出した。また、こちらからA児のやる気を引き出すような言葉かけをするようにした。

教師：「“ミ”の練習をしてみよう。」

A児に指使いを指導した。

教師：「次に来た時に聴かせてね。」

近くの男子児童がA児に指使いを教えていた。

A児のもとに行き、聴かせてもらった。

教師：「すごい。」

男子児童：「すごいじゃん。」

男子児童は、笑顔でA児に声をかけた。

A児は、照れたように笑っていた。

このように、周りの児童と同じリコーダーを使いながらA児に可能な課題を与えることで、周りの児童がA児に教えたり、声をかけたりといったかかわりが生まれた。また、教師が言葉かけをすることで、周りの児童もA児に注目することができ、A児も周りの児童からの視線や言葉かけに気づくことができ、お互いに意識することができた。

一方、通常学級担任としては、個人での練習の時にA児の指導に気を取られてしまい、全体

を見ることができない場面があった。通常学級担任が全体を見ながら、どのタイミングでA児への指導をしていけるかを考えることが必要である。また、A児への指導の際に、A児に何をさせたいかを共通理解した上で、特別支援学級担任に指導を行ってもらおうといった連携も必要となってくるのがわかった。

イ. 第2次 リコーダーを演奏してみよう (全体の第3時間目)

「情熱大陸」の小節ごとのリコーダー練習の続きを行い、何度か1曲通してリコーダー演奏を行った。

個別の対応として、リコーダー演奏が難しいA児にオルガンを使ってリズムをとる役割を与えた。また、場の設定として、みんなの前に出てお互いに向かい合って活動する場を設定した。

A児がオルガンで音を出し、周りの児童がそれに合わせながらリコーダーで一曲通した。A児のリズムに合わせてようとする児童らの姿が見られた。A児は、リコーダーを演奏する児童のほうを時折見ている。

このように、A児にできることをさせながら活動を行っていくことで、周りの児童と共に活動を行っているという仲間意識を持つことができたのではないかと考える。また、双方が向かい合い、活動を行うことで意識しながら一曲通し、一体感を持たせることができた。

ウ. 第3次 それぞれの楽器で練習しよう (全体の第5時間目)

楽器ごとにそれぞれグループに分かれ、目標を設定した上で、グループごとに練習を行っていった。

場の設定として、自由度が高いグループ活動を、児童と一緒に活動する場として設定した。個別の対応としては、児童同士が同じグループで一緒に練習をしていくことを意識し合えるように、言葉かけや練習場所の移動の指示を行った。

児童：「Aさん。こっちだよ。」

A児を呼びに来たが動かない。

教師：「A児の近くで練習してみようか。」

グループの児童を移動させた。

しばらくし、A児はマラカスを持ち始めた。

教師：「Bさんと一緒にやってみよう。」

B児がA児にマラカスを教えていた。

このように、各グループが目標を立て、その目標達成に向けて各グループで練習を進めていくといった、比較的自由度が高いグループ活動を設定することで、A児が自分のペースで周りの児童の様子を見ながら活動に参加することができた。また、言葉かけや場所移動の指示を教師が適宜行うことで、児童同士が意識し、共に学ぼうとする姿が見られた。

一方、グループ活動を行う時に、A児がいるグループを2人の教師で指導をしてしまっていることがあった。グループ数も多いので、互いの動きを見ながら指導や支援を行っていく必要がある。

エ. 第4次 みんなで合奏を完成させよう (全体の第7時間目)

この時間はグループ活動を行った後に、全体で最初から最後まで通して演奏を行った。

A児がラジカセの前にいたので、打楽器グループの中ですぐに移動ができる一部の児童をA児の近くに移動させ、グループ活動を行うよう指示した。

A児はラジカセの前に座っていた。

教師：「Aくんラジカセの前でやってみよう。」

タンバリンとマラカスの児童に言葉かけを行い、活動場所の移動を行わせた。

児童がA児の近くに来て、CDに合わせて、「せーの」と練習する姿が見られた。

また、全体で通す際、A児の方に体を向けて演奏を行うように指示を行った。

A児の方に体を向ける形で演奏を行った。

A児は体を動かしながら、最後まで演奏をすることができた。授業後に、

女子児童：「マラカスの音がすごく聞こえたよ。」

このように、グループ活動を何度か行っていくことで、A児はグループ活動に慣れてきてい

ることがわかる。また、同じ教室の他のグループの児童とのかかわりもみられた。

内容が同じであるグループ活動を何度か続けることは、特別支援学級児童にとっては参加しやすく、徐々に周りの児童とのかかわりが増えていくのではないかと考える。

5.研究のまとめ

(1)成果

①指導案での具体的手立ての明確化

指導案の中に、「交流及び共同学習に関する手立て」を入れることによって、全体の音楽の授業の流れに沿って活動を考えたり、確認したりすることができた。このようにすることで、交流及び共同学習の視点で活動を考えやすくなった。

②場の設定と個別の対応

具体的な手立てとして行った場の設定と個別の対応の中で、以下の2つが成果として考えられる。

ア. みんなでできる活動の設定

全体の授業に沿った個別な課題を特別支援学級の児童に与えたり、自由度が高く、継続的に行えるグループ活動を取り入れたことで、児童全体の一体感や児童同士のかかわりを生み出すことができた。

全体の活動に沿った個別の課題や、自由度が高く継続的に行っていけるグループ活動は、交流及び共同学習に取り入れながら行うことで双方向の交流や共に学ぶことにつながると考えられる。

また、グループ活動に関しては、グループのメンバーを代えたり、グループの人数を変えながら行っていくことも可能であると考えられる。

イ. 児童同士が意識し合える場の設定

特別支援学級児童を前に出したり、児童同士を向かい合わせて活動を行わせたりすることで、児童同士が意識しながら活動ができる場を提供できた。また、そのような場で通常学級担

任教師が全体に言葉かけを行っていくことで、より児童同士が意識して活動を行っていくことができた。

特別支援学級児童に授業の中での役割を与えたり、前に出したりしながら活動を行っていくことは、共に学ぶことにつながると考えられる。また、様子を見ながら通常学級担任が全体を通して言葉かけを行うことで、児童同士が意識することにつながると考えられる。

(2)課題

①指導案の「交流及び共同学習に関する手立て」欄の改善

子どもたちのどのような姿をねらっているのか、通常学級担任と特別支援学級担任が授業の中でどのように動いていくのかといったことが明確になるように、指導案の内容をより具体的に考える必要がある。

表 5. 「交流及び共同学習に関する手立て」欄の改善案

交流及び共同学習に関する手立て
◎同じ楽器を使って活動することで、お互いに意識しながら活動できるようにする。(i)
◎A 児が練習しているのに周りの児童が気づき、注目できるようにする。
◎同じリコーダーを使った活動をさせる。 全体⇒情熱大陸を小節ごと練習。 A 児⇒指定した1音を練習。
◎A 児にオルガンでリズムをとる役割をさせる。 「Aくん、先生と一緒にリズムをとってくれますか。」
◎個人活動の時、通常学級担任は、全体を見ながらA 児のところへも行くようにする。特別支援学級担任は、A 児の指導を中心に行う。教師A がA 児に指導しているときには、周りの児童の様子を見ながら指導を行う。(ii)

表 5 は、表 3 の「交流及び共同学習に関する手立て」の欄に改善を加えたものである。下線部が改善として追加した内容である。

下線部(i)は、活動における交流及び共同学

習に関したねらいである。このように示しておくことで、活動のねらいを教師間で共有できると考える。また、ねらいを示すことで児童への指導や支援も考えやすくなるのではないかと考える。

下線部(ii)は、活動内での通常学級担任と特別支援学級担任の役割である。このように示しておくことで、指導案を見た段階で各担任が活動内容と自分の動きを確認することができるのではないかと考える。

②グループ活動の目標設定

目標の項目がわかりにくく、意図したような目標を児童が設定することが難しかった。このことから、目標の項目を具体的にしたり、目標の立て方の説明をしたりする必要があると考える。

例えば、項目内容を「1.技術目標」、「2.グループで協力して練習するために」とする。今回の目標設定の場面の中で、あるグループに、「協力して練習ができるといいね。」と助言をすると、「ペアで練習をする」といった目標を設定した。これは、相手を意識しながら練習を行っていく目標になっていると考えられる。このことから、「協力」という言葉が入ることによって、グループの児童を意識しながら目標が立てられるのではないかと考える。

また、グループ全員が協力して練習ができるような目標の設定を促す指導を教師が心がけていく必要があると考える。

③通常学級担任と特別支援学級担任の役割

打ち合わせが十分にできないまま、授業の中で連携をしていくことは、難しいということがわかった。打ち合わせ時間がとれない中で、通常学級担任と特別支援学級担任がどのように活動や児童に関わっていくかということを明確にしておく必要がある。

また、授業の中で、児童の様子や活動の様子等を見ながら連携をとっていくことも必要である。その際に、以下のことを通常学級担任と特別支援学級担任が共通認識したうえで、連携

をとっていく必要があると考える。

ア. 全体での活動

- ・特別支援学級児童を前に出して活動を行う際は、通常学級担任が特別支援学級児童の指導や支援を行いながら全体を進め、特別支援学級担任は、周りの児童の指導や支援に入る。

イ. 個人活動, ペア活動, グループ活動

- ・通常学級担任と特別支援学級担任がお互いの動きを見ながら、指導や支援をする。
- ・特別支援学級児童が授業に参加できない場合は、特別支援学級担任についてもらうようにしておく。

(3)来年度の研究に向けて

来年度は、今年度の課題として挙げたグループ活動と授業に関わるそれぞれの教師の役割に焦点を当てて交流及び共同学習について考えていきたい。

また、障害の種類によって考えられる手立ても様々だと考えられるので、可能であれば来年度は、情緒に障害をもつ児童についての交流及び共同学習のあり方についても考えていきたい。

引用文献

- ・遠藤恵美子・佐藤慎二(2012) 小学校における交流及び共同学習の現状と課題.植草学園短期大学研究紀要,13,59-64.
- ・高畑英樹(2012) 授業研究会の実際(4) 柘植雅義・堀江祐爾・清水静海(編) 教科教育と特別支援教育のコラボレーション-授業研究の新たな挑戦(132~133) 金子書房
- ・文部科学省(2008) 小学校学習指導要領解説 音楽編
- ・文部科学省(平成21年以前登録) 特別支援教育について 交流及び共同学習ガイド http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/010/001/001.htm (2016.12.1取得)